

* 寺尾寿に東京大学を追われ、三井財閥の総帥になった団琢磨

東京天文台 100 周年記念誌資料のリスト作りをしていて、面白い史料を発見した。これは、天文学史研究家の佐藤利男氏が 1979 年（昭和 54 年）6 月 10 日付で東京天文台教授の斎藤国治氏に送った史料である。東京天文台 100 周年は 1978 年であるから、この資料は 100 周年記念誌発行後に東京天文台に届いたものであろう、この資料が 100 周年記念誌編集委員の手に渡り大量の資料のなかに残されたと考えられる。

この資料は、佐藤利男氏が団琢磨は東京天文台 100 周年記念誌には登場しないが、東京天文台の歴史にはその名を残さねばと思われたものと思う。アーカイブ室新聞第 22 号に初代東京天文台長「寺尾寿」の東京大学教授満 25 年祝賀会の写真を発見した記事を書いた際、その中に団琢磨が写っていると主張されたのも佐藤利男氏であった。佐藤氏が団琢磨だと主張される写真に映った人は、写真と共に保管されていた名前一覧には「緒方政規博士」とあり、筆者の鑑定では団琢磨に非常に似てはいるがその髪型から、その人物は団琢磨ではなく、やはり緒方博士と思われたことがあった。

佐藤氏が、斎藤国治氏に送った史料は、「男爵団琢磨伝（上）」のコピーであり、その第 15 章 「東京大学助教授」の項である。この章の最初に、団琢磨がアメリカ留学から帰国し、大阪専門学校助教授から東京大学助教授に転任したあたりの事情が書かれている。団琢磨は、安政 5 年（1858 年）、筑前国福岡荒戸町で、福岡藩士馬廻役神尾宅之丞の 4 男として生まれ、12 歳の時、福岡藩勘定奉行團尚静の養子となり、寺尾寿も学んだ藩校修猷館で学んでいる。明治 4 年（1871 年）、旧藩主にあたる黒田長知の供として岩倉使節団に同行してアメリカに渡り、そのまま留学しマサチューセッツ工科大学鉱山学科を卒業した工学博士である。明治 11 年（1878 年）帰国後、大坂専門学校（旧制第三高等学校の前身）助教（最近、大学で使われ始めた助教という用語がこの時代にあった）についていた。この大坂専門学校が中学校になる際、転身して東京大学の「星学」助教授になったいきさつについては、天文学の当時の様子が読み取れるので「男爵団琢磨上」の文章を引用しよう。

以下引用：大坂専門学校助教としての大坂時代 3 年間は、君にとりて必ずしも愉快なる月日ではなかった。よし帰朝早々君の心を痛めた就職難は、それによりて免かるるを得、物質的には寧ろ恵まれた生活を続けたのであったが、何分にも其職務は英語を主とせる一教師に過ぎなかった。当時我国に於て極めて稀なるバチュラー・オヴ・サイエンスの学士号を有する鉱山学専門家の職務としては誠に相応しからざるものであった。加之専門学校が廃せられて中学校となつては君に長く此に留まるの意が無く、東京に帰りたき意思が頗る切になった。かくて奇しき運命は君を東京大学に転任せしめ、又しても君が専門ならざる星学の講座に關係せしめた。

明治十四五年度東京大学法理学部一覽を繙いた人は、その理学部職員奏任助教授のなかに君の氏名を見出すであろう。而かも君が姓名の上に記された担任授業科目は、採鉱学又は冶金学にあらずして「星学」とあるを見て、果して此れが50年前の君であるかを先ず疑うであろう。

美術品蒐集の為屢々下坂して君の宅に宿泊した東京大学御雇教師ホールは星学の講座を担当して居たが、明治14年9月星学科は理学部に於て一独立専攻科に陞格し、彼れは同大学卒業の寺尾寿が明治12年に海外に派遣せられて未だ帰朝せざれば其間助手にも当るべき者を物色しつつあった。一日彼は君に対して助教授として東京大学に転任の意志やなきやと問うた。君は其担任すべき科目が君の専攻学科にあらざる旨を答えたに対し、彼は君に期待する業務が単に天文台に於て星座を観測して時刻を定むる極めて易々たることで、少しく予め口授解説すれば容易の業たる旨を告げて切に転任を慫慂する所があった。理学部長菊地大麓亦君の就任を承諾したので、茲に君も東京に転任する決心を固めた。かくて明治14年10月君は東京大学奏任助教授に任命せられた。

そもそも東京大学は明治10年4月、東京開成学校、東京医学校を合併し、新たに法理文医の4学部を以て構成せられ、東京英語学校を東京大学予備門と改称して此れに附属せしめたもので、明治14年君が赴任した当時は綜理として加藤弘之、綜理補予備門主幹として服部一三在職し、理学部には部長菊地大麓の下に左記の教授助教授及び講師が夫々頭書の講義を担当して居た。：引用終わり

関係する陣容は、教授：純正及び応用数学・菊地大麓、物理学・山川健次郎、星学・ヘンリー・エム・ホール。助教授（奏）：星学・団琢磨、助教授（判）：气象台観測方・理学士桐山篤三郎とあり、団琢磨に関係した星学科では、星学理論、星学実験、純正数学、物理学、重学、応用数学、イギリス語、ドイツ語の講義があった。

また、この講義が紹介された後の文章に当時の天文関係者が登場し、当時の事情を知ることができるので改めて引用する。

以下引用：

右の科目中星学実験の指導は実に君の職務で、この実験を課せらるるものは、数学科第2学年、物理学科第4学年、星学科第2、3、4学年であった。物理学界の碩学藤澤利喜太郎、田中館愛橘等が、君を先生と呼んだのはこれが為である。其専攻生たる星学科学生の実験は、第2年級に於て子午儀、天頂儀、紀限儀の運用、時間及経度の測定、水平尺及分微尺の用法を実習し、参考書としてはルーミス及シャウプネーの著書を用い、第3年級に於て赤道儀の観測及移算、分光鏡及光線計の使用、卯西儀の緯度測定をシャウプネーの著書に参考し、第4年級に於て子午儀の観測及移算、子午圈恒差の測定をヘッセル、シャウピネーの著書によって行っている。此の観測所は当時観象台と呼ばれて明治11年9月に本郷元富士町に建設せられて居たものであったが、明治15年2月に至って天象台と气象台との二つに分かれたものである。

当時の学生にして後年迄君と交渉を持った学生は物理学科藤澤利喜太郎、田中正平、田

中館愛橘、長岡半太郎、採鉱冶金科野呂景義、松田武一郎、山田直矢、山田太郎等で、当時の星学科学生は4学年を通じてただ第4学年級に隅本有尚あるのみであった。

然し東京大学助教授に就任した事情は前に述べた行き懸りであった為、直接講義に携わる訳ではなかった。従って当時学生であった藤澤利喜太郎、田中館愛橘、長岡半太郎の追懐を綜合すると、此等学生は鳶色の洋服を着た此助教授と友達半分に打ち解けて親しく天体観測の製図などしたことは深く印象付けられて居る。

当時君は、独身の気軽さ直ちに東京大学内天象台側の宿直部屋に落付いたが、君の主なる教務は夜間に天体の観測をなすにあつた為、日没の頃より五番館に隣れる天象台に移つて居た。曇天を幸い番町の金子邸（金子は、団琢磨と共に岩倉使節団に加わり、一緒にアメリカに渡りハーバード大学へ進んだ。二人の交友はその後も続き、後に金子の妹芳子と結婚し義弟となった）を訪れた折など、にわかには月明かりとなり、或は群星上空に現れたる折には急ぎ天象台に帰ることもあつた。

君は東京大学助教授時代に於てその職務とせる天体の観測以外に、地震学に興味を有して研究を進め地震に関する論文を発表して居る。又同郷の友人原恒太郎を談り、科学書の翻訳を企て君が邦語に口訳するを原は邦文に綴つて居た。惜哉今は其原書名等を知る由がない。

君の天象台の生活が4年目を迎えた明治17年の春、予て星学専攻の為仏国に留学せる寺尾寿が帰国の期は近づいたし、大学にても教職員の整理を必要として居た為、君は己が進退を考慮せねばならなくなつた。寺尾は君と郷里を同じくせる福岡の出身で莫逆の友であつたが、後年遠慮なく諧謔的に談つた言葉に「**自分は団君の恩人である。何故となれば、今日君が斯程の榮達を為したるは、云わば自分が君を大学より追出したからである。あの折僅かな情を以て大学に留めて居たならば、君は恐らく今日の榮達処か、低き地位に一生を送つたであらう**」と。かくて君は君の上司であつた文部省輔九鬼隆一の斡旋によって工部省に其地位を得た

：引用終わり

と書かれており、寺尾が団琢磨を、情を以て東京大学に留めていたならば、三井の総帥にまでは榮達することはなかつたろう、寺尾が団琢磨を東京大学から追出したからこそと、寺尾は団の大恩人と言っている。この史実、なかなかおもしろい。